

梯川^{かはし}の河口の港町、安宅。梯川に架かる住吉橋は白山眺望地として知られ、遠くに見える白山山系の鈴ヶ岳に源を発する川の流れば、河口付近ではゆるやかに、静かな港町にはゆったりとした時が流れる。

安宅には昔、多くの桜が植えられていて春の桜の盛りの時は、その見事さに「花の安宅」と呼ばれたそう。謡曲「安宅」の中で、「花の安宅に着きにけり。花の安宅につきにけり」と謡われたた面影は、残念ながら今の安宅の町に見ることはできない。

安宅という地名の起こりは、「寇^{あだ}が浦

だとされる。異国人が海を渡って来襲する浦^{うら}海岸ということ、古代の日本における朝鮮半島との交流の中で安宅が重要な海路の要所であったことがうかがえる。平安時代中期に編纂された延喜式には安宅駅の設置が記載されていて、陸上交通上も安宅が要地であったことがわかる。

そして源平の時代。梯川河口付近、木曾義仲を総大将とする源氏軍五万と、平維盛^{これもり}を総大将とする平氏軍10万の軍勢が、安宅から篠原にかけての広大な砂浜の上で壮絶な合戦を繰り広げたと『源平盛衰記』に書かれている。

白山信仰と 奥州藤原氏と義経

勸進帳の舞台として有名な安宅の関。義経一行が奥州平泉に落ち延びる時に、滋賀から北陸路を通り奥州へ向かったのは、白山信仰が深く関わっていると考えられる。

平安時代に白山妙理権現が比叡山に勧請されて以来、白山信仰と天台宗は深い関係にあった。白山を開山した泰澄伝説に見る白山信仰は、天台宗と結びついた神仏混合の思想である。そして義経が幼少期を過ごした鞍馬寺は天台宗の寺。また、義経を庇護した奥州平泉の藤原氏は、白山を深く崇拝している。「平泉」の地名は越前の白山信仰の中心、平泉寺にちなむもの。奥州藤原氏と

ゆかりの深い中尊寺は天台宗東北大本山であり、この中尊寺の鎮守はなんと白山権現である。

安宅を抜けた義経一行はその後、手取川(手取川の名は「義経主従が急な流れの川を手に手を取って渡った」ことが由来だという説もある)を渡り白山権現に参拝したと伝えられている。

平安末期、白山本宮は比叡山延暦寺の末社であり、白山信仰に関わる勢力が義経一行を奥州へ逃すため、険しい山づたいの道を案内したとも言われている。

白山比祥神社には義経を庇護した奥州藤原秀衡が奉納したと伝えられる木製の狛犬が一对残されている。

安宅、まちあるき。^{あたか}

写真・文 タカヤナギユタカ

かつて木曾義仲や平維盛、源義経や弁慶など、多くの時代の英雄たちが足跡を残した歴史に生きる静かな港町、安宅を歩く。